百人一首　一覧表（上の句・下の句）

上の句と下の句を歌番号順にならべました。赤い字は「決まり字」（読み手がここまで読めば取れる札がわかる文字）です。10首ごとに太い線があります。

番号	上の句	下の句	決まり字	歌人
1	秋の田のかりほの庵の苫を荒み	わがころも手は露に濡れつつ	あきの	天智天皇
2	春すぎて夏来にけらし白たへの	ころもほすてふあまの香具山	はるす	持統天皇
3	あしびきの山鳥の尾のしだり尾の	ながながし夜をひとりかも寝む	あし	柿本人麻呂
4	田子の浦にうちいでて見れば白たへの	富士の高嶺に雪は降りつつ	たご	山部赤人
5	奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の	声聞く時ぞ秋は悲しき	おく	猿丸太夫
6	かささぎの渡せる橋に置く霜の	白きを見れば夜ぞふけにける	かさ	中納言家持
7	あまの原ふりさけ見ればかすがなる	三笠の山にいでし月かも	あまの	安倍仲麻呂
8	わが庵は都のたつみしかぞ住む	世を宇治山と人はいふなり	わがい	喜撰法師
9	花の色はうつりにけりないたづらに	わが身世にふるながめせしまに	はなの	小野小町
10	これやこの行くも帰るも別れては	知るも知らぬも逢坂の関	これ	蝉丸
11	わたのはら八十島かけて漕ぎいでぬと	人には告げよあまの釣舟	わたのはらや	参議篁
12	あまつ風雲のかよひ路吹きとぢよ	をとめの姿しばしとどめむ	あまつ	僧正遍昭
13	つくばねの峰より落つるみなの川	恋ぞ積りて淵となりぬる	つく	陽成院
14	みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆゑに	乱れそめにしわれならなくに	みち	河原左大臣
15	きみがため春の野にいでて若菜摘む	わがころも手に雪は降りつつ	きみがためは	光孝天皇
16	たち別れいなばの山の峰に生ふる	まつとし聞かばいま帰り来む	たち	中納言行平
17	ちはやぶる神代も聞かず竜田川	からくれなゐに水くくるとは	ちは	在原業平朝臣
18	すみの江の岸による波よるさへや	夢のかよひ路人目よくらむ	す	藤原敏行朝臣
19	なにはがた短きあしのふしのまも	あはでこの世をすぐしてよとや	なにはが	伊勢
20	わびぬれば今はた同じなにはなる	みをつくしてもあはむとぞ思ふ	わび	元良親王
21	いま来むといひしばかりに長月の	有明の月を待ちいでつるかな	いまこ	素性法師
22	ふくからに秋の草木のしをるれば	むべ山風を嵐といふらむ	ふ	文屋康秀
23	月見ればちぢにものこそ悲しけれ	わが身ひとつの秋にはあらねど	つき	大江千里
24	このたびはぬさも取りあへずたむけ山	もみぢのにしき神のまにまに	この	菅家
25	名にし負はば逢坂山のさねかづら	人に知られで来るよしもがな	なにし	三条右大臣
26	小倉山峰のもみぢ葉心あらば	今ひとたびのみゆき待たなむ	をぐ	貞信公
27	みかの原わきて流るる泉川	いつ見きとてか恋しかるらむ	みかの	中納言兼輔
28	山里は冬ぞ寂しさまさりける	人目も草もかれぬと思へば	やまざ	源宗于朝臣
29	こころあてに折らばや折らむ初霜の	置きまどはせる白菊の花	こころあ	凡河内躬恒
30	有明のつれなく見えし別れより	暁ばかりうきものはなし	ありあ	壬生忠岑
31	あさぼらけ有明の月と見るまでに	吉野の里に降れる白雪	あさぼらけあ	坂上是則
32	山川に風のかけたるしがらみは	流れもあへぬもみぢなりけり	やまが	春道列樹
33	ひさかたの光のどけき春の日に	しづ心なく花の散るらむ	ひさ	紀友則
34	たれをかも知る人にせむ高砂の	松も昔の友ならなくに	たれ	藤原興風
35	人はいさ心も知らずふる里は	花ぞ昔の香に匂ひける	ひとは	紀貫之
36	夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを	雲のいづこに月宿るらむ	なつ	清原深養父
37	白露に風の吹きしく秋の野は	つらぬきとめぬ玉ぞ散りける	しら	文屋朝康
38	忘らるる身をば思はずちかひてし	人の命の惜しくもあるかな	わすら	右近
39	浅茅生の小野のしの原忍ぶれど	あまりてなどか人の恋しき	あさぢ	参議等
40	しのぶれど色にいでにけりわが恋は	ものや思ふと人の問ふまで	しの	平兼盛
41	恋すてふわが名はまだき立ちにけり	人知れずこそ思ひそめしか	こひ	壬生忠見
42	ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ	末の松山波越さじとは	ちぎりき	清原元輔
43	あひ見ての後の心にくらぶれば	昔はものを思はざりけり	あひ	中納言敦忠
44	あふことの絶えてしなくばなかなかに	人をも身をも恨みざらまし	あふこ	中納言朝忠
45	あはれとも言ふべき人は思ほえで	身のいたづらになりぬべきかな	あはれ	謙徳公
46	ゆらのとを渡る舟人かぢを絶え	行くへも知らぬ恋の道かな	ゆら	曾禰好忠
47	八重むぐら茂れるやどの寂しきに	人こそ見えね秋は来にけり	やへ	恵慶法師
48	風をいたみ岩打つ波のおのれのみ	くだけてものを思ふ頃かな	かぜを	源重之
49	み垣もり衛士のたく火の夜はもえ	昼は消えつつものをこそ思へ	みかき	大中臣能宣朝臣
50	きみがため惜しからざりし命さへ	長くもがなと思ひけるかな	きみがためを	藤原義孝

百人一首 一覧表（上の句・下の句）

上の句と下の句を歌番号順にならべました。赤い字は「決まり字」（読み手がここまで読めば取れる札がわかる文字）です。10首ごとに太い線があります。

番号	上の句	下の句	決まり字	歌人
51	かくとだにえやはいぶきのさしも草	さしも知らじなもゆる思ひを	かく	藤原実方朝臣
52	明けぬれば暮るるものとは知りながら	なほ恨めしき朝ぼらけかな	あけ	藤原道信朝臣
53	なげきつつひとりぬる夜の明くるまは	いかに久しきものとかは知る	なげき	右大将道綱母
54	わすれじの行く末まではかたければ	今日を限りの命ともがな	わすれ	儀同三司母
55	滝の音は絶えて久しくなりぬれど	名こそ流れてなほ聞こえけれ	たき	大納言公任
56	あらざらむこの世のほかの思ひ出に	今ひとたびのあふこともがな	あらざ	和泉式部
57	めぐりあひて見しやそれともわかぬまに	雲隠れにし夜はの月かな	め	紫式部
58	ありま山ゐなの笹原風吹けば	いでそよ人を忘れやはする	ありま	大弐三位
59	やすらはで寝なましものをさ夜ふけて	かたぶくまでの月を見しかな	やす	赤染衛門
60	大江山いく野の道の遠ければ	まだふみも見ずあまの橋立	おほえ	小式部内侍
61	いにしへの奈良の都の八重桜	今日九重ににほひぬるかな	いに	伊勢大輔
62	夜をこめてとりのそらねははかるとも	よに逢坂の関は許さじ	よを	清少納言
63	いまはただ思ひ絶えなむとばかりを	人づてならで言ふよしもがな	いまは	左京大夫道雅
64	あさぼらけ宇治の川霧絶え絶えに	あらはれわたる瀬々の網代木	あさぼらけう	中納言定頼
65	うらみわびほさぬ袖だにあるものを	恋にくちなむ名こそ惜しけれ	うら	相模
66	もろともにあはれと思へ山桜	花よりほかに知る人もなし	もろ	大僧正行尊
67	春の夜の夢ばかりなる手枕に	かひなく立たむ名こそ惜しけれ	はるの	周防内侍
68	こころにもあらでうき世にながらへば	恋しかるべき夜はの月かな	こころに	三条院
69	あらし吹くみむろの山のもみぢ葉は	竜田の川のにしきなりけり	あらし	能因法師
70	さびしさにやどを立ちいでてながむれば	いづくも同じ秋の夕暮	さ	良暹法師
71	夕されば門田の稲葉おとづれて	あしのまろ屋に秋風ぞ吹く	ゆふ	大納言経信
72	音に聞くたかしの浜のあだ波は	かけじや袖の濡れもこそすれ	おと	祐子内親王家紀伊
73	高砂のをのへの桜咲きにけり	と山のかすみ立たずもあらなむ	たか	権中納言匡房
74	うかりける人を初瀬の山おろし	激しかれとは祈らぬものを	うか	源俊頼朝臣
75	ちぎりおきしさせもが露を命にて	あはれ今年の秋もいぬめり	ちぎりお	藤原基俊
76	わたの原漕ぎいでて見ればひさかたの	雲居にまがふ沖つ白波	わたのはらこ	法性寺入道前関白太政大臣
77	瀬を早み岩にせかるる滝川の	われても末にあはむとぞ思ふ	せ	崇徳院
78	淡路島かよふ千鳥の鳴く声に	いく夜寝覚めぬ須磨の関もり	あはぢ	源兼昌
79	秋風にたなびく雲の絶え間より	もれいづる月の影のさやけさ	あきか	左京大夫顕輔
80	長からむ心も知らず黒髪の	乱れて今朝はものをこそ思へ	ながか	待賢門院堀川
81	ほととぎす鳴きつるかたをながむれば	ただ有明の月ぞ残れる	ほ	後徳大寺左大臣
82	思ひわびさても命はあるものを	うきにたへぬは涙なりけり	おも	道因法師
83	よのなかよ道こそなけれ思ひ入る	山の奥にも鹿ぞ鳴くなる	よのなかよ	皇太后宮大夫俊成
84	ながらへばまたこの頃やしのばれむ	うしと見し世ぞ今は恋しき	ながら	藤原清輔朝臣
85	よもすがらもの思ふ頃は明けやらで	ねやのひまさへつれなかりけり	よも	俊恵法師
86	歎けとて月やはものを思はする	かこち顔なるわが涙かな	なげけ	西行法師
87	むらさめの露もまだひぬまきの葉に	霧たちのぼる秋の夕暮	む	寂蓮法師
88	なには江のあしのかり寝のひとよゆゑ	身をつくしてや恋ひわたるべき	なにはえ	皇嘉門院別当
89	玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば	忍ぶることの弱りもぞする	たま	式子内親王
90	見せばやな雄島のあまの袖だにも	濡れにぞ濡れし色は変らず	みせ	殷富門院大輔
91	きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに	ころもかた敷きひとりかも寝む	きり	後京極摂政前太政大臣
92	わが袖は潮ひに見えぬ沖の石の	人こそ知らね乾くまもなし	わがそ	二条院讃岐
93	よのなかは常にもがもなぎさ漕ぐ	あまのを舟の綱手かなしも	よのなかは	鎌倉右大臣
94	み吉野の山の秋風さ夜ふけて	ふるさと寒くころも打つなり	みよ	参議雅経
95	おほけなくうき世の民におほふかな	わが立つそまに墨染の袖	おほけ	前大僧正慈円
96	花さそふ嵐の庭の雪ならで	ふりゆくものはわが身なりけり	はなさ	入道前太政大臣
97	来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに	やくやもしほの身もこがれつつ	こぬ	権中納言定家
98	風そよぐならの小川の夕暮は	みそぎぞ夏のしるしなりける	かぜそ	従二位家隆
99	人も惜し人も恨めしあぢきなく	世を思ふゆゑにもの思ふ身は	ひとも	後鳥羽院
100	ももしきや古き軒ばの忍ぶにも	なほあまりある昔なりけり	もも	順徳院

下の句かくし 練習シート

下の句をかくした練習用です。上の句を見て、下の句を書いてみよう。答えは1〜2ページで確かめられます。

番号	上の句	下の句	決まり字	歌人
1	秋の田のかりほの庵の苫を荒み	……	あきの	天智天皇
2	春すぎて夏来にけらし白たへの	……	はるす	持統天皇
3	あしびきの山鳥の尾のしだり尾の	……	あし	柿本人麻呂
4	田子の浦にうちいでて見れば白たへの	……	たご	山部赤人
5	奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の	……	おく	猿丸太夫
6	かささぎの渡せる橋に置く霜の	……	かさ	中納言家持
7	あまの原ふりさけ見ればかすがなる	……	あまの	安倍仲麻呂
8	わが庵は都のたつみしかぞ住む	……	わがい	喜撰法師
9	花の色はうつりにけりないたづらに	……	はなの	小野小町
10	これやこの行くも帰るも別れては	……	これ	蝉丸
11	わたのはら八十島かけて漕ぎいでぬと	……	わたのはらや	参議篁
12	あまつ風雲のかよひ路吹きとぢよ	……	あまつ	僧正遍昭
13	つくばねの峰より落つるみなの川	……	つく	陽成院
14	みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆゑに	……	みち	河原左大臣
15	きみがため春の野にいでて若菜摘む	……	きみがためは	光孝天皇
16	たち別れいなばの山の峰に生ふる	……	たち	中納言行平
17	ちはやぶる神代も聞かず竜田川	……	ちは	在原業平朝臣
18	すみの江の岸による波よるさへや	……	す	藤原敏行朝臣
19	なにはがた短きあしのふしのまも	……	なにはが	伊勢
20	わびぬれば今はた同じなにはなる	……	わび	元良親王
21	いま来むといひしばかりに長月の	……	いまこ	素性法師
22	ふくからに秋の草木のしをるれば	……	ふ	文屋康秀
23	月見ればちぢにものこそ悲しけれ	……	つき	大江千里
24	このたびはぬさも取りあへずたむけ山	……	この	菅家
25	名にし負はば逢坂山のさねかづら	……	なにし	三条右大臣
26	小倉山峰のもみぢ葉心あらば	……	をぐ	貞信公
27	みかの原わきて流るる泉川	……	みかの	中納言兼輔
28	山里は冬ぞ寂しさまさりける	……	やまざ	源宗于朝臣
29	こころあてに折らばや折らむ初霜の	……	こころあ	凡河内躬恒
30	有明のつれなく見えし別れより	……	ありあ	壬生忠岑
31	あさぼらけ有明の月と見るまでに	……	あさぼらけあ	坂上是則
32	山川に風のかけたるしがらみは	……	やまが	春道列樹
33	ひさかたの光のどけき春の日に	……	ひさ	紀友則
34	たれをかも知る人にせむ高砂の	……	たれ	藤原興風
35	人はいさ心も知らずふる里は	……	ひとは	紀貫之
36	夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを	……	なつ	清原深養父
37	白露に風の吹きしく秋の野は	……	しら	文屋朝康
38	忘らるる身をば思はずちかひてし	……	わすら	右近
39	浅茅生の小野のしの原忍ぶれど	……	あさぢ	参議等
40	しのぶれど色にいでにけりわが恋は	……	しの	平兼盛
41	恋すてふわが名はまだき立ちにけり	……	こひ	壬生忠見
42	ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ	……	ちぎりき	清原元輔
43	あひ見ての後の心にくらぶれば	……	あひ	中納言敦忠
44	あふことの絶えてしなくばなかなかに	……	あふこ	中納言朝忠
45	あはれとも言ふべき人は思ほえで	……	あはれ	謙徳公
46	ゆらのとを渡る舟人かぢを絶え	……	ゆら	曾禰好忠
47	八重むぐら茂れるやどの寂しきに	……	やへ	恵慶法師
48	風をいたみ岩打つ波のおのれのみ	……	かぜを	源重之
49	み垣もり衛士のたく火の夜はもえ	……	みかき	大中臣能宣朝臣
50	きみがため惜しからざりし命さへ	……	きみがためを	藤原義孝

下の句かくし 練習シート

下の句をかくした練習用です。上の句を見て、下の句を書いてみよう。答えは1〜2ページで確かめられます。

番号	上の句	下の句	決まり字	歌人
51	かくとだにえやはいぶきのさしも草		かく	藤原実方朝臣
52	明けぬれば暮るるものとは知りながら		あけ	藤原道信朝臣
53	なげきつつひとりぬる夜の明くるまは		なげき	右大将道綱母
54	わすれじの行く末まではかたければ		わすれ	儀同三司母
55	滝の音は絶えて久しくなりぬれど		たき	大納言公任
56	あらざらむこの世のほかの思ひ出に		あらざ	和泉式部
57	めぐりあひて見しやそれともわかぬまに		め	紫式部
58	ありま山ゐなの笹原風吹けば		ありま	大弐三位
59	やすらはで寝なましものをさ夜ふけて		やす	赤染衛門
60	大江山いく野の道の遠ければ		おほえ	小式部内侍
61	いにしへの奈良の都の八重桜		いに	伊勢大輔
62	夜をこめてとりのそらねははかるとも		よを	清少納言
63	いまはただ思ひ絶えなむとばかりを		いまは	左京大夫道雅
64	あさぼらけ宇治の川霧絶え絶えに		あさぼらけう	中納言定頼
65	うらみわびほさぬ袖だにあるものを		うら	相模
66	もろともにあはれと思へ山桜		もろ	大僧正行尊
67	春の夜の夢ばかりなる手枕に		はるの	周防内侍
68	こころにもあらでうき世にながらへば		こころに	三条院
69	あらし吹くみむろの山のもみぢ葉は		あらし	能因法師
70	さびしさにやどを立ちいでてながむれば		さ	良暹法師
71	夕されば門田の稲葉おとづれて		ゆふ	大納言経信
72	音に聞くたかしの浜のあだ波は		おと	祐子内親王家紀伊
73	高砂のをのへの桜咲きにけり		たか	権中納言匡房
74	うかりける人を初瀬の山おろし		うか	源俊頼朝臣
75	ちぎりおきしさせもが露を命にて		ちぎりお	藤原基俊
76	わたの原漕ぎいでて見ればひさかたの		わたのはらこ	法性寺入道前関白太政大臣
77	瀬を早み岩にせかるる滝川の		せ	崇徳院
78	淡路島かよふ千鳥の鳴く声に		あはぢ	源兼昌
79	秋風にたなびく雲の絶え間より		あきか	左京大夫顕輔
80	長からむ心も知らず黒髪の		ながか	待賢門院堀川
81	ほととぎす鳴きつるかたをながむれば		ほ	後徳大寺左大臣
82	思ひわびさても命はあるものを		おも	道因法師
83	よのなかよ道こそなけれ思ひ入る		よのなかよ	皇太后宮大夫俊成
84	ながらへばまたこの頃やしのばれむ		ながら	藤原清輔朝臣
85	よもすがらもの思ふ頃は明けやらで		よも	俊恵法師
86	歎けとて月やはものを思はする		なげけ	西行法師
87	むらさめの露もまだひぬまきの葉に		む	寂蓮法師
88	なには江のあしのかり寝のひとよゆゑ		なにはえ	皇嘉門院別当
89	玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば		たま	式子内親王
90	見せばやな雄島のあまの袖だにも		みせ	殷富門院大輔
91	きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに		きり	後京極摂政前太政大臣
92	わが袖は潮ひに見えぬ沖の石の		わがそ	二条院讃岐
93	よのなかは常にもがもなぎさ漕ぐ		よのなかは	鎌倉右大臣
94	み吉野の山の秋風さ夜ふけて		みよ	参議雅経
95	おほけなくうき世の民におほふかな		おほけ	前大僧正慈円
96	花さそふ嵐の庭の雪ならで		はなさ	入道前太政大臣
97	来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに		こぬ	権中納言定家
98	風そよぐならの小川の夕暮は		かぜそ	従二位家隆
99	人も惜し人も恨めしあぢきなく		ひとも	後鳥羽院
100	ももしきや古き軒ばの忍ぶにも		もも	順徳院